

ミルキーピア物語

京美ちゃんの家出

Tohno Tsukasa

東野 司



早川書房

NV=Novel
NF=Nonfiction
Jr=Junior
FT=Fantasy
YR=Young Romance
GB=Game Book

ミルキーピア物語
京美ちゃんの家出

〈JA292〉

一九八九年四月十日 印刷
一九八九年四月十五日 発行

（定価はカバーに表
示してあります）

著 者 東 野 司

発 行 者 早 川 清

印 刷 者 矢 島 貞 雄

発 行 所 株式会社 早 川 書 房

郵便番号 一〇一

東京都千代田区神田多町二ノ二
電話東京(二五二)三一一一(大代表)
振替口座番号 東京六〇四七七九九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・信毎書籍印刷株式会社 製本・株式会社明光社

ISBN4-15-030292-8 C0193

ハヤカワ文庫JA

〈JA292〉

ミルキーピア物語

京美ちゃんの家出

東野 司



早川書房

2591

カバー／口絵／挿絵

横山えいじ

目次

《ミルキーピア物語》第一話	
京美ちゃんの家出……………	七
《ミルキーピア物語》第二話	
聖哉くん、誘拐！……………	四九
《ミルキーピア物語》第三話	
フェスティバルキャラの逆襲……………	一〇七
あとがき……………	三五

京美ちゃんの家出

《ミルキーピア物語》第一話
京美ちゃんの家出

「京美が逃げ出したア！」

「そんな大声出さないでよ。もう、頭ん中、グチャグチャなんだから」

ヨネコ社長はこめかみを押さえる。両目は赤く腫れ上がり、業界を生き抜いてきた三十三歳の女の意気地はどこへやら。新宿広蘭オフィスビルの十五階。『システムハウス・ミルキーピア』の三月の第三月曜日の朝はこんな感じで始まった。

シャネルスーツの袖口を濡らしてヨネコ社長はじとじと泣くし、経理担当の麻矢^{マヤ}さんもトウインクルヘアをもてあそびながら、窓の外の第二首都高のランプウェイを見つめている。もう一人の社員である俺、片山秀人の腹の中で、駅前のタベロツェリアで詰め込んできたトロロバーガーがでんぐり返っていた。

京美がただの女の子なら驚きはしない。今日び、年頃の女の子の家出などコンビニエンスストアの強盗よりもニュース性のない事件だ。でも、京美は違う。ミルキーピアの大切な商品。

ネットワーク上で稼働する『パーソナルアイドル』の人気NO・1ソフトだ。

アミューズメント業界の噂的。俺が容姿と知性、それに男から見た女の心理パターンを担当し、ヨネコ社長が深層心理と感性・行動パターンを製作して、二人で一年四カ月十五日三時間十二分かけた苦心の作。これ一本でうちの社は業界ランク十七位までのし上がった。そのソフトが家出するなんて！

「とりあえず、調べてみましょう。何かの間違いっていうことも……」

「だめよ。あたしだって調べてみたんだから」

ヨネコ社長の泣き言を聞きながら、俺は隣のサーヴィスルームに入った。そこにはホストコンピュータHYA・960Cが設置され、百五十回線を処理できるシステムになっている。俺はコンソールにつくと、『京美』をモニタした。ホログラム用もディスプレイ用も、二種類の『京美』は両方ともからっぽだった。プログラムシエルには『ごめんなさい。あたしを捜さないで 京美』と記されている。

あいつめ、こんな常套文句をどこで覚えてきたんだ。

月曜の十時前だというのに、全国から七十回線が『京美』を呼び出している。しかし、HYA・960Cは、『誠に申し訳ございませんが、都合によりただ今「京美」のサーヴィスは中止させて頂いております』のテロップを流すばかりだった。外から侵入した形跡は無い。明らかに内側からネットワークに飛び出して行方不明になっている。

「うーん」

俺は頭を抱えた。夕べ、いとしの大洋ドルフィンは憎つくき読売サンシャインズに三連敗して、ついに最下位に落ちてしまった。

あの時横浜エアドームの上空には、いやあな色の雲が漂っていたっけ……。

サーヴィスソフトは外からのアクセスに対しては何重ものプロテクトを施している。でも内側から対してはまるで無防備だ。ソフト上に作られた“人格”が家出するなんて、誰が想像したのだろうか。俺は襟元を緩め、オフィスに戻った。

「絶対、産業スパイやね。ハッカーに違いないと思うわ。警察に知らせた方がいいんと違う」麻矢さんはデスクに戻って、顧客管理リストを起動させている。切り換えの速さは抜群だ。

「外から破った形跡はないのよ。証拠も無いし。警察に言っただけどうしようもないわよ。京美、一体何が不満だったっていうの」

また涙声のヨネコ社長。ガンコな割には涙もろいから、扱いに困ってしまう。

「搜索願いなんで、ウチの信用にかかわるし、どうしよう……」

きた。社長をお願い声。そんなに流し目しなくても、ただでさえ厚化粧なんだから。

「バックアップ用でごまかすわけにもいきませんからねえ……」

俺は大げさにうなって見せる。

京美はグロージングアップソフトだ。ユーザーが利用するたびに学習機能が働き、場数を踏んだ京美は人格を成長させていく。京美を稼働してほぼ半年。バックアップ用ディスクはもちろんあるが、経験値0のそれを使うことは、せつかくのユーザーを逃しちまうことになりかね

ない。歌舞伎町を体だけは立派な小学生が歩くようなもんだ。バックアップ京美は最後の手段。やはり、家出した京美を捜し出し連れ戻すのが先決だ。

でもどうやって？

外から泥棒が入ったのなら、ドアをこじあけた様子とかどこから侵入したとかという跡が残ってるものだが、家の中から鍵あけて出ていったんじゃない。その跡もない。ネットワーク探査用プログラム『しらみつぶし』もあるけど、その名の通りしらみつぶし方式では、とっても時間がおっつかない。時は金なり。一刻も早く捕まえてはいけなけれど、なんせ、俺も初めて出くわした事件。どうしていいのか見当もつきやしない。

壁に大きく貼られた京美のホログラムシートを見つめる。

毛先をゴールデンアンバーに染めたショートカット。茶褐色の瞳。耳からうなじにかけての強調したライン。肩から胸はスレンダーに、そして、小振りながらもしっかり盛り上げた胸。女は肉ではないラインだ、と言ったのはスペインの舞踏家ディアス・カスカンテ。俺は忠実にその教えを守った。ウエストから足元までの蔓草が伸びるようなスレンダーライン。ライン、ラインだ。腰に手をあてて、ねだるような目線。ドレスアップは思い切ってカジュアルに。エラムストリートブランドのジャケットをゆったり着て、ニースラルチェックのストリートパンツ。もちろん、麗沙耶伽のオリジナルデザインだ。

『ハァーイ。元気ってる？』

今にもあの跳ねるような声が聞こえてきそうだ。俺の好みをすべてぶち込んだ、全力投入ソ

フト。親の心子知らずっていうのはこの事か。まだ二十五だっていうのに……。

「だからね、秀人くん……頼みはあなたしかないのよオ」

社長の涙に鼻水が混じり始めた。あー、口に流れる。と、ぶちゃひゃん。大きな音をたてて社長が鼻をかんだ。イタリア製ティアッチイーノのハンカチーフが一枚、これでクリーニング行きた。

「社長、もしかすると、あれですかあ……」

俺は自然情け無い声になる。涙と鼻水で化粧がはがれている。その顔でヨネコ社長がニコツと笑った。目尻にシワが団体で現われる。

「そう、そうなの。あなたにネットワークに入って貰いたいの」

「よっ！ 秀人。ネットワークに潜らせたらあんたは日本一や！」

大向こうから麻矢さんのかけ声が掛かる。

あやっ！ こいつはできレースだ。社長と麻矢さん、はなから俺を潜らせるつもりで……。

「しゃちょおう！」

「えらい！ 秀人はえらい！」

麻矢さんがデスクを回ってくると、俺の肩をポンと叩く。

「そりゃ、そうやわなあ。社長と共同製作とはいえ、京美はあんたの子供同然。子供の不始末の責任は親がとる。いやあ、あんた今時の若いもんじゃ、珍しいほど人間ができとるなあ……」

「秀人くん、お願い、あなたしかないの」

麻矢さんに肩を抱かれ、デスク越しに社長は俺の両手を握って放さない。

ふへーん。

俺は半分泣き顔だ。

ネットワーク潜り。こいつは俺の裏ワザ。と言って悪ければ一種の超能力だ。

親父が自営のシステム屋をやっていたこともあり、キーボードのリズムで子守歌を聴き、物心ついたときには家のキーボードでピアノの練習、六歳の頃には、ベット代わりに端末機を連れて遊びに出ていた俺。どうした訳か、思春期の声変わりと一緒に端末内侵入できる力がついてしまった。

端末に接続した脳電イメージ検出^{ブレイン}キャップをかぶり、五十年前にはやったというスプーン曲げの要領で「はいれ、はいれ」と精神集中しちゃうと、何とするりするりとはいっちまうんだ、これが。

脳内酵素が環境的遠因でバイオチップ型の働きをしているっていう医者もいたけど、俺にだって自分の頭ん中のしくみはわかりやしない。でも、はいっちまうもんは仕方ない。とはいえ俺自身はあんまり気持ちいいもんじゃないんだ。むちゃくちゃ疲れるし、ネットワークから出てしばらくは思考力0の状態になっちゃう。

親父には嫌われ、ずっと隠してきたんだけど、京美を作るとき必要に迫られて中に潜ったことがあって、社長や麻矢さんに知られてしまったてワケ。

あてにはしないでって言っているのに……。

「社長。他の手はないですかあ」

「こらこら、何言うとんの。こんな時のために高い給料はろうとんのやろ。さあ、ぐずぐず言わんと……」

麻矢さん、俺を羽交締めにしようとする。

「ね、秀人くん」

社長まで、デスクを回って俺の胸に体を預けてくる。三十五歳と三十三歳にはさまれて、俺は悲鳴を上げた。

「わかりました。やります。やりますよお！」

「ほんと！」

「よおし、よお言った」

瞬間、二人はさっと離れてニコニコ笑い顔。

「じゃ、お願いね。サーヴィスの穴埋め処理を片付けたら、私もモニタ前に待機するから……」

「がんばりいや。気が向いたらコーヒー持ってってあげるさかい」

麻矢さんはもう経理ディスプレイとにらめっこ。手だけヒラヒラと振っている。ネットワークに潜ってて何でコーヒーが飲めるんですよお、まったく。

「そいじゃ、サンディのサワーケーキでも付けてもらおうかなあ。クリームたっぶりのやつ」
ケーキ嫌いの俺の精一杯の皮肉。しかし……。